

## 弘法大師のご足跡 (59・1・21)

——長安へ密教を求めて——

鳥越 正道 (昭18文丙)

今日は弘法さんのご縁日でございます。とくにこの、一月二十一日は「初弘法」と申しまして、京都の九条大宮の東寺の境内は大ぜいの参詣客でごった返すのでございます。弘法大師のご命日は旧暦の三月二十一日なのですが、毎月二十一日は御影供みえくと称しまして弘法大師の御姿をおまつりしてある東寺の御影堂みえどうで法要が営まれ、数万におよぶ参詣者と、それをあてこむ露店で東寺周辺は一日中賑わうわけであります。

かく申します私も、東寺の末寺の一員として、毎月二十一日は長男とともに東寺の御影供法要に参列するように心がけているのですが、今日は特に弘法大師についてのお話を頼まれましたので、法要も大切ですが、皆様にお大師様のお話しをさせて頂くことも大師様の御徳を讃えることになると思います、僭越ながらお受けしたような次第でございます。

さて、皆さま方はすでにご存じのことと思いますが、弘法大師のお名前、つまり僧名は空海と申します。そして、世間でもいまは「空海」と呼び捨てにするのが流行のようです。映画の題名も「空海」、高校生が日本史で学ぶのも「空海」です。「弘法大師」というと若者の中には知らない人さえあります。ところが中年以上の人になると「空海」といってもわからなくて、逆に「弘法大師」というとわかる人が多いようです。中には「お大師さま」だけで弘法大師と思う人さえいる程です。わが国で古来、大師号を賜った僧侶は真言宗で七名、天台宗で八名、その他全部あわせて二十余名あると申しますが、中でも弘法大師のように「お大師さま」だけで通るのは本当に珍しいようございます。

私どもは弘法大師をお祖師さまとして信仰するほか、天才的な偉人として、また日本文化の父として尊敬して居ります。今年(昭和五十九年)は、弘法大師御入定千五百年という記念すべき年にあたります。この「ご入定」という言葉は、世間一般の表現でいえば「亡くなられた」ということなのです。

お大師さまが亡くなられた時は、弟子たちは「入定留身まどみ」という言葉を用いてはおりましたが、一般には後世、弘法大師に対する信仰が栄えてまいりましてから「ご入定」という言葉が使われるようになったのです。今からちょうど五十年前に弘法大師の千百年の記念の年があったんです。昭和九年でございます。私はまだ小学校の五年生位だったかと思いますが、その時分には、ご入

定という言葉はまだ用いられず、世間並みに「弘法大師千百年御遠忌」という名称が使われていることをおぼえております。これは仏教のどの宗旨でも同じことで、皆、御遠忌と称して居ります。その昭和九年からちょうど五十年たつて、世の中の考え方も変わってまいりまして、特にこの弘法大師というお方はご入定をされたんだ、亡くなられたんだ、お大師さまは、永遠である、と云う信仰がますます定着してまいりまして、今年は特にご遠忌の年といわずに、ご入定記念の年という事を申しております。今日はそう云う記念の年の第一回のお大師様のご縁日、二十一日です。いわゆる初弘法と云うんですね。今日は朝から雪がちらついてたいへん寒い日でございますけれども、私の方の本山である東寺では大ぜいの参詣客が押すな押すなでございます。私がお大師さまのご縁日に、ここで皆様方に、弘法大師のお話を多少でも申し上げて、どう云うお方であつたかと云う事をご理解いただけたら、御影供法要を欠席した私の罪はそれだけ軽くなるんじゃないかと云う風に考えておるわけでございます。今日お手元にプリントを差し上げましたが、実はこのプリントを先日、ここの事務局で見本にお見せしましたら、先程ご挨拶いただきました日比野丈夫先生が「この長安の地図は、どうも私が若いころに書いたものだ」とおっしゃって、私はびっくりしたんでございますけれど、実はいろんなところから拝借してコピーさせて頂きました。この中で私が書いたものといえ、ほんの一部分でございますので、どうぞその点ご了承願いたいと思うわけでございます。今日は特に、歴史的な事とか、又は宗教的な事

につきました、ご専門の先生方も大勢おられると思いますので、私のような者がお話申し上げる事はないと思うんですが、ただ私は最近、中国でちよつと変つた経験をして参りましたので、そう云う事を中心にお話を進めさせていただきたいと思ひます。

まず弘法大師についての略年表をご覧いただきますと、だいたい今回のテーマでございます。弘法大師のご足跡——長安へ密教を求めて——と云うこの今日の題目につきましたのあらまし、つまり、弘法大師と云うお方は、どう云う風な事をされたのかということをお大體順を追つておわかり頂けるだらうと思ひまして、あえて私が拾ひ上げたものでございます。この略年表の中には、いろんな説があつて、確定してない事もありますので、ちよつとそう云う風な表わし方をしてゐるのもあるわけでございますのでご了承願ひます。

弘法大師空海というお方は、奈良朝の西暦七七四年、光仁天皇の御代、宝龜五年という年の六月十五日に、四国の讃岐の国、今の香川県の多度郡屏風ヶ浦、つまり現在の普通寺のあたりでお生まれになつたのでございます。私、これから弘法大師と云う風に申し上げるのが普通でございますけれども、やはり学問的に申しますと、呼び捨てになりまして、偉い人程、呼び捨てが多うございますが、空海と云う事になります。弘法大師は空海、伝教大師は最澄というのがお名前でございますけど、空海と云うお名前も、何べんか改名された上、最後に定着したのがこの空海なのです。しかも海と云う字はサンスイ偏に毎と云う字ではなくて、毎の下に水を書く、空兼かひと云

弘法大師空海関係略年表

西曆	年号	記事
七六七	神護景雲元	(最澄 近江国滋賀郡にて出生)
七七四	宝亀五	空海 讃岐国多度郡にて出生(この日、唐不空三藏(真言第六祖)入寂)
七八八	延暦七	空海 上京し阿戸大足について勉学(最澄比叡山寺を建立)
七九一	" 一〇	空海 大学に入学(「聲誓指帰」を著わす ——「三教指帰」の草稿)
七九三	" 一二	空海 和泉国槇尾山寺にて勤操に随い剃髪すと伝う
七九四	" 一三	(平安京奠都)
七九五	" 一四	空海 東大寺戒壇院にて具足戒を受くと伝う
七九六	" 一五	(平安京の東寺・西寺、官寺として創建)
七九七	" 一六	空海 「三教指帰」(出家宣言の書)を著わす
七九八	" 一七	空海 大和国久米寺の宝塔にて大日経を感得すと伝う
八〇四	" 二三	空海・最澄ら遣唐使船にて入唐、最澄は天台山へ、空海は長安へ入京
八〇五	" 二四	(最澄帰国)空海 長安青竜寺の恵果阿闍梨(真言第七祖)より受法 (同年末恵果入寂)
八〇六	大同元	空海 帰国、太宰府に滞在(最澄比叡山で菩薩戒を授ける)

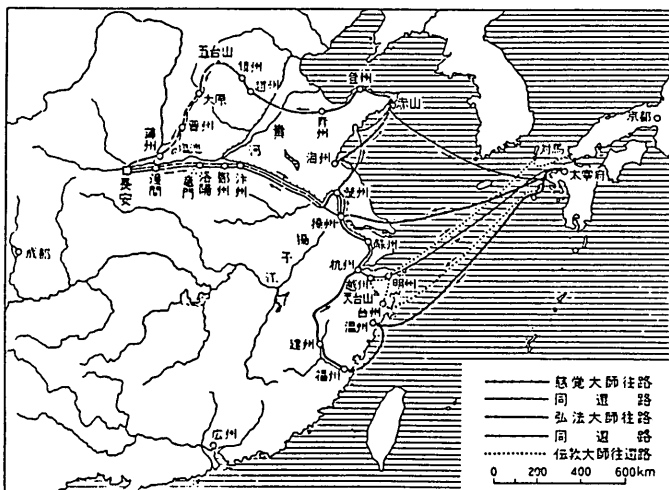
八二〇	弘仁元	空海 上表し、鎮護国家のため修法することを請う。このころ、高雄山寺へ入寺、乙訓寺、東大寺別当となる
八二二	〃 三	空海 高雄山寺にて金剛界灌頂、ついで胎藏法灌頂を行う
八一六	〃 七	空海 高野山を道場建立の地として賜わりたいと上奏し、勅許あり、翌弘仁八、九年、高野山開創に着手、金剛峯寺を創建
八二一	〃 一二	空海 讃岐国萬濃池修築別当に任せられ、難工事に成功
八二二	〃 一三	勅して東大寺に灌頂道場（真言院）を建立し、空海に鎮護国家のため息災増益の法を行わせる（最澄入寂、比叡山戒壇設立が勅許される）
八二三	〃 一四	勅して東寺を空海に賜る
八二四	天長元	空海 勅により神泉苑にて請雨経法を修する（延暦寺大講堂建立、義真天台座主となる）
八二五	〃 二	空海 勅を奉じて東寺に講堂を建立、以後同寺を教王護国寺と称する
八二八	〃 五	空海 綜芸種智院を創立し、庶民子弟の教育を始める
八三二	〃 九	空海 高野山にて万灯会を行う
八三四	承和元	（一月）空海中務省にて後七日御修法を修する（十二月）空海の上奏により、宮中に真言院を設け、以後、後七日御修法は毎年恒例となる
八三五	〃 二	空海 高野山にて入定する
八三八	〃 五	（円仁・円行・円載・常晓入唐）

八四二	〃	九	(唐の武宗排仏を行う——会昌の法難)
八六六	貞観	八	
九二一	延喜	二	
			空海に弘法大師の諡号を勅賜される

うのが正しいお名前ですので、その点もあらかじめご了承願いたいと思いますし、特に弘法大師という称号は、弘法大師がご入定なさってはるかのち、醍醐天皇から賜わった大師号でございまして、それまでは、弘法大師とは云わなかつたのでございます。

今、東映で「空海」という映画を作っております、このご入定記念の年の四月頃に封切されます。北大路欣也と云う俳優がお大師さまの役をつとめまして、近日完成の予定だそうです。最近この映画のポスターを見ますと、空とか海とか云う、空海の名前をもじって、いろんなキャッチフレーズを書いておるようでございますけれど、我々の立場といたしましては、空海と呼び捨てにするのはおそれ多いし、そう云う風な言葉を使うのも、もつたいないと云うのが、いわゆる宗内での考え方でございます。しかしそういう私も空海と呼び捨てにする場合もございしますのでどうぞご了承願います。序論ばかり長くなっても仕方がないので、いよいよ本論に入りたいと思います。

弘法大師は今から千百年以上も昔に、はるかな中国へ行かれましたが、これをわれわれ宗門で



### 主な入唐求法僧のコース

(図説『世界文化史大系中国Ⅱ』(角川書店)より)

は「唐に入る」と書いて入唐と申します。それから「法を求める」と書いて「求法」と読みます。つまり中国の唐の国へ行つて仏法を求める「入唐求法」という言葉が定着しております。つまり弘法大師は唐の長安の都へ密教を求めて行かれたというわけでございます。今日は皆様俗人のお方が多いと思ひ込んだものですから、入唐求法といわずに、サブタイトルとして「——長安へ密教を求めて——」と表示させて頂いたわけでございます。

大師が入唐なされたのは、西暦八〇四年でございます。延暦二十三年ですが、唐の年号で申しますと貞元二十年です。

この年に遣唐使の藤原葛野麻呂と一緒に中国へ行かれたと云う事でございます。



さきほど申しました東映の映画でも、その遣唐使の船を特にロケ撮影のために造ったと云うわけで、昔の絵を参考にしまして、いわゆる本式の船ではないんですけど、ロケに使えるような船を造って映画を撮ったということです。この船は現在、長崎の平戸の港につないであるようですが、やはり、運輸省か何かの許可がないと本当の海を航海することはできないようです。その当時としましては、非常に立派な船だったろうと思うんですけど、現在からみますと、何といたしましても、千二百年前の事でございますので、非常にもろいといえますか、不完全な物であっただろうと思うんですね。その船に乗られました中国へ渡られたんです。その時、四隻の船が出たんですね。まず今の大阪、難波津あたりから出帆し、九州の田ノ浦というところまで行って、そこからいよいよ東シナ海を渡って中国へ行く、と云う事なんです。現在のようにひまわり衛星もありませんし、風や雨の予報も無いような時代でございますので「一か八か」といいますか、本当に生命を賭して行かれたんだと思います。田ノ浦から四隻出帆しましたが、すぐ二日後、台風に遭遇して、二隻は難破して沈んだりダメになってしまった。四隻のうち二隻、つまり確率五〇%というわけですが、それも順調に航海を続けて中国へ着かれたんではなくて、やはり一か月、二か月という日数を要して行っておられるわけです。

第一船に遣唐使が乗っておられて、ちょうどその船に弘法大師が乗られた。第二船には比叡山の伝教大師、最澄さんが乗られまして、この二隻だけがうまく中国へ着く事ができた。しかも予

定通り、早い日数で目的地へ着いたんではなく、殆ど漂流のような形で、特に弘法大師の乗られた第一船は、もっと南の方の福建省の赤岸鎮と云う所へ八月に着いた。そこへ上陸しようと思つたけれども、辺鄙な所へ着いたもんですから、土地の役人さんが怪しんで上陸を許可しないと云うような事がございました。最澄さんの第二船はちょっと遅れましたけれど、九月はじめ明州に漂着して、この方がかえつて結局はよかつたんで、早速、目的とする天台山の国清寺へ登られたのでございます。

ところが、弘法大師の船は、どうしても上陸を許してもらえないので、困っていたところが、弘法大師が、「私を手紙を書いてやろう」と、「大使の福州觀察使に与えるがための書」と云うのを書かれて、まず土地の役人に渡しました。するとその筆といい、文章といい、非常に立派なので、土地の役人がびつくりしましてすぐ長安の都へ伺いを立てたということです。今度はそれについて、大師は「福州の觀察使に請うて入京する啓」という手紙を書かれた。それで長安の都へ入る事ができるようになって、十一月に許可が得まして福州を出発し、十二月によく無事に長安へ入られたというわけです。

私の勤めている種智院大学でも、一昨年、中国へ行く計画を立てましたが、同じ行くのなら、お大師さまの辿られた道を歩いて、五、六十日かけても西安（昔の長安）まで行こうじゃないかと言う意見もありましたが、私は実は反対したんです。というのは、千二百年後の現在でも、中

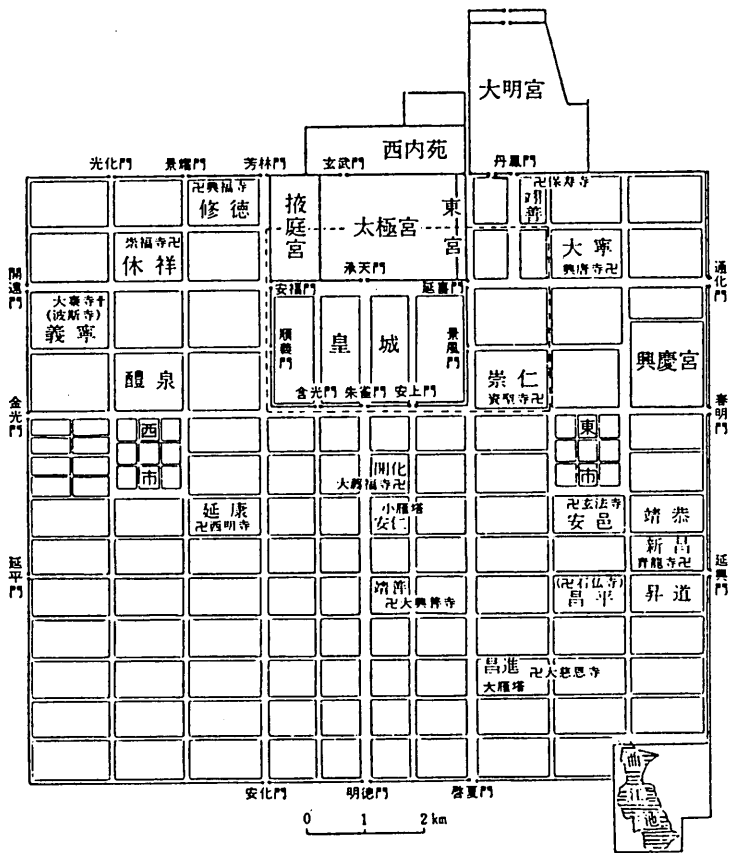
国では昔と似たような話がありまして、中国側の許可がなかなか出ないんです。決まったコースを、決まった方法で旅行するのはよいが、勝手な事をするなど云うわけで、多分、許可は出ないだろうと思つたわけです。今年、高野山の方では、やはり大学の静慈圓先生を団長としまして、毎日新聞の取材記者メンバーと一緒に八人で、このお大師さんの行かれた通りのコースを、ずつと歩いてではないですけど、歩いたり、車に乗ったり大運河を船に乗ったりして、だんく華中から華北へ行き、そして陝西省へ入って長安の都へ行くと云うような計画をたてておられると云う事を新聞でも拝見しましたし、話としても、伺っております。我々、真言宗の関係者としては、長安の都と云うものが、お大師様が伝授をお受けになつた非常に大事な場所であるという事で、このようにたいへん尊重しておるわけでございます。

私は一昨年、二回中国へまいりました。その第一回目として行きましたのが、今日皆様に、これからお目にかけます八ミリ映画の分です。一昨年の五月の末から、六月の初めにかけて真言宗各派から六名で訪中したのでございます。その目的は、弘法大師の行かれた長安の都、つまり現在の西安市で、大師が真言密教の奥儀を伝授されました青龍寺の遺跡に御堂を復活して建立しようという日中合同の協議交渉の第三回目のためでした。普通には青龍と申しますが、私も宗内では青龍寺と呼びならわして居ります。中国でもわが国でも東西南北のことを青龍、白虎、朱雀、玄武と申しますが、そのためかどうかは兎も角として、青龍寺は昔の長安の東側の城

壁近くの新昌坊というところにありました。

青龍寺というのは長安の都でも有数の大寺院で、唐時代にはその子院（塔頭）として浄土院、聖仏院、そして真言密教にとつて最も大切な東塔院などがありました。弘法大師はこの青龍寺の東塔院において、大師のお師匠様にあたります。惠果阿闍梨から真言密教の奥儀である灌頂をお受けになったのでございます。しかし、実はこの青龍寺は、長安にあった他の大寺院とちがって、その所在や遺跡が長らく不明のままであり、漸く最近二、三十年前に発掘によってその遺跡が確認されたばかりのところなのです。この青龍寺についての詳しい経緯は後で申し上げるつもりでございますが、この青龍寺の東塔院のお堂を復元建立したいというのが日本側のかねてからの念願でした。

そして中国側もその話にうまくのつてくれまして、日中合同で、東塔院の遺跡を復元しようじやないかということになり、そのための交渉が二、三年前から続けられておりましたが、私等がまいりましたのは、第三回目の訪中団でございまして、しかも、ちょうど幸いと申しますか、運よくうまく日中合同でお堂復元建立の最後の詰めが終りまして、正式調印という運びになったわけです。それは忘れもしませんが、昭和五十七年の六月二日の夕方でございます。私は八ミリの撮影機を持っていったものですから調印前後の様子をうつして来ましたが、つまらないしろくと映画でございます。……自分で写して、自分で編集したものですから、なかなか思うように出来



長安城坊復元図〔…の区画が現在の西安城〕

(石田幹之助著『長安の春』参照)

あがってはいませんが、見ていただいて、あ、そう云う事だったのかとご理解いただけたらこの上ない幸せだと考えております。

映画を上映しますまでに、もう少し説明させて頂きますが、現在の西安市イェアというのは、非常に大きな都会になっております。人口も二八〇万人と申しますが、城内だけでなく、はるかに広い郊外の、京都でいいましたら、八瀬、大原から花背の奥まで京都市だというのと同じように、西安もだいたい田舎の方までが、西安市なのでございます。ところが昔の長安の都と云うのは、現よりも城が、つまり城内の面積が非常に大きかったのでございまして、現在のだいたい六倍はあったといわれています。長安の都は、当時人口百万におよぶ国際都市だったと申しますが、映画でこれからお目にかけます青龍寺にしましても、また大雁塔で有名な大慈恩寺ですね、それから小雁塔のある大薦福寺、それから不空三蔵の住いされた大興善寺、こう云う有名なお寺は全部、昔は長安の城内にあったわけです。しかし現在では城が小さくなりまして、その為に城外に出てしまったような形になっております。けれども西安の市内であるという風な変な具合になっているわけでございます。この長安で弘法大師は勉強をなさって、しかも最後に青龍寺の東塔院におきまして恵果阿闍梨から伝授をお受けになって日本へ帰ってこられたと云う事なのでございます。長安の都はよくシルクロードの原点といわれますが、玄奘三蔵がインドからシルクロードを経て中国へ持って帰られたお経を訳された大雁塔、大慈恩寺の大雁塔と云うのは非常に大きなもの

ですね、京都の東寺の五重塔が五十七メートルで日本一だといわれていますけれど、大雁塔は高さが六十四メートルですね。レンガ造りの七層塔ですが、それが長安の都のシンボルになっております。それから小雁塔というのは四十五メートル位、十五層建の塔だったんですが、今から約五百年前の大地震でタテに亀裂きれつ、つまりひびが入り、そして上の方二、三層はまだ破損したままになっていきます。これは義浄三蔵がやはりインドから持って帰られたお経を訳された所でございます。これらの塔が現在、西安といえますと必ずシンボルとして出てまいります。

また西安の別のシンボルとして、これまた今日の映画にも出てまいります、西安の市街の中心にある鐘楼といまして、いわゆる釣鐘堂ですね。毎日定時に鐘を鳴らして時刻を知らせたその鐘楼は、シルクロードの原点として、NHKのシルクロードのテレビ特集には、必ず最初に出てまいります。このような雰囲気の長安城内で、弘法大師も勉強されたと思うんですね。ただし千二百年前のその時分はこの鐘楼はなかったですね。多分、今ある鐘楼と云うところは、昔の長安城の図面でいうと、真中より北の点線で囲んだところ、これが現在の西安城ですが、そのだいたい中心部ですから、ちょうど「皇城」と書いた所の辺にあたり、ずっと後世（明時代）にできたもので、この鐘楼は昔からあったものではないわけです。

ただ先程申しましたその南の方にある小雁塔（大薦福寺）、それから更にその南にある大興善寺、その東南にある昌進坊にある大雁塔（大慈恩寺）、この辺は昔から長安城内にあった有名な寺

院でございまして、しかも、唐時代にはこれ以外にも非常にたくさんのお寺があったわけでございます。

私が「密教と関係のあった長安の主な寺院と僧侶」(次ページ)という表にまとめてみましたが、これ以外にも非常にたくさんのお寺があったわけでありまして、このうち現在残っておりますのが、上の欄に分けて書いておきました大薦福寺、大慈恩寺、大興善寺、それから遺跡を発掘されたものとしては、青龍寺ですね。密教で大切な東塔院のあった寺院でございます。それ以外は、所在した場所のわかっているのが、その左に書いてありまして、その中には弘法大師が長安の都へ行かれて泊られたという西明寺や、般若三蔵から梵文を学ばれたという醴泉寺など、大切な寺もございまして。所在未確認の寺院というのが下の欄にあります。そしてお寺はこれで全部かというところではなくて、密教以外のお寺というのもこの表のほかにはたくさんありまして、非常に寺院が多かったと思います。何しろ中国全土で唐時代には四千六百のお寺があったといわれております。別の説では、四万お寺があったという事もいわれております。

弘法大師が日本へ帰られましてから約四十年の後に、「会昌の法難」という仏教界にとつてはたいへんな災難が起っております。それはどう云う事かという、唐の武宗という皇帝が、「道教が中国では大事な宗教だ、だから仏教であろうが、ほかの宗教であろうが、みな潰してしまえ」と云うわけで、いわゆる極端な廃仏毀釈のようなことが起りました。これを会昌の法難(八四二—



密教と関係のあった唐都長安の主な寺院と僧侶

所在の判明した寺院		所在未確認の寺院	
区分	寺名	関係僧侶名	寺名
(現存)	大薦福寺	義浄、金剛智	崇陽寺
(現存)	大慈恩寺	玄奘、金剛智、義福、造玄、惠果、牟尼室利、般若	鴻臚寺
(現存)	大興善寺	玄奘、金剛智、不空、慧朗、惠應、惠則、智慧輪、元政、牟尼室利、円仁、文璨、円珍、宗叡	浄影寺
遺跡発掘	青龍寺	曇貞、惠果、義明、義操、造玄、空海、辨弘、円仁、円行、惠運、惠日、義円、惟尚、円珍、円載、法潤、義真、法全、文秘、真如、宗叡	華嚴寺
	崇福寺	慧朗、大通、牟尼室利、般若	龍興寺
			浄住寺
			景公寺
			深達
			海雲
			義一
			一行
			善無畏
			不空
			不空
			一行

興福寺	西明寺	保壽寺	資聖寺	興唐寺	玄法寺	醴泉寺	慧日寺
善無畏	善無畏、般若、円照、空海、真如	不空、元皎、覚超	金剛智	一行	法全、円仁	惠果、義智、般若、牟尼室利、文苑、空海、靈仙	惟謹

八四五)と申します。この時、中国全土で四千六百の寺院が破壊され、二十六万人の僧尼が全部還俗させられたといわれて居ります。

この時の排仏は非常に激しかったので、私が問題にしておりますこの青龍寺もですね。その時に潰されたと云われています。ところが、やはりたいへん重要なお寺であるという事で、すぐに復活しまして、そして十年程たったら元の青龍寺として、やっていけたといわれています。

このような衝撃的な大事件が発生したこともあり、やがて中国における密教というものが次第に衰滅するという経過を辿って行ったわけであり、その直前の時期に弘法大師が日本へ密教

を持ち帰られたのがうまく残り、しかも栄えまして、現在の真言宗として立派に開花したわけ  
でございます。

そもそも弘法大師は何故に多大の危険を冒してまでして、中国へ密教を求めて行かれたのでし  
ようか。略年表をご覧いただきますと、西暦七九八年に「空海、久米寺の宝塔にて大日経を感得  
すと伝えられる」という風に書いてありますけれども、この年号はちよつとあまり当てにならない  
のでありまして、いろいろな説があるわけでございます。

大師が二十四才のときに三教指帰さんこうしきを著わされてから、中国へ行かれますまでの七年間というも  
のはですね。非常に曖昧なのでありまして、消息不明、これはどこの本にもそう書いてあります。  
いったい、その間お大師さまは何をしておられたのかという事なんぞでございますけれども、よく  
考えてみますと、それまでも大師は非常に勉強されております。すでに十五才の時には、阿戸大  
足について学んで、世間の勉強はもう充分にマスターしておられたという風に聞いておりますし、  
それから三教指帰を著わされたという事は、儒教、道教、仏教を一応学ばれた上での出家宣言の  
書である、わたしは僧侶になるんだという事を内外に宣言する為に三教指帰という文章を書かれ  
たんだといわれております。

それから大師は、西暦七九八年、二十五才の時に久米寺の宝塔で大日経を感得されたといわれ  
ております。これがまたちよつとおもしろいと云うと失礼にあたるかもしれませんが、私はお大

師さまのゆかりのある寺々を取材してまわって気がついたんですけれど、奈良の東大寺に真言院という塔頭があります。そこへ行きますと、そこは奈良時代の養老年間に中国から善無畏三蔵が来ておられたんだと云う伝説があるわけです。ところが養老年間というのは西暦で申しますと、七十七年ぐらいから二十三年頃ですが、善無畏三蔵がインドを出られて、中国へ到着されたのが西暦七一六年だと思えますので、どうもその時分は日本へ来られるだけの余裕が無かつたのではないかと思ふんです。また、橿原神宮のすぐそばにあります久米寺へ行きますと同じような伝説があつて、善無畏三蔵が来られて大日経をこの久米寺の宝塔に納められたといわれています。

私は不勉強なものですから、いろんな本を改めて調べていきますと、だんだんとわかつてまいりましたのは、まずこの大日経と申しましても漢訳の大日経は、西暦七二四、五年頃に、善無畏三蔵が中国で訳された。したがつて、養老年間でしたら、大日経はまだサンスクリットの原典しか無かつたんじゃないかと思ふんですね。ではこの漢訳の大日経七巻は日本へいつ請来されたのかと云う事を歴史的に考えてみますと、西暦七三六、七年頃のことだと云われており、すでに天平九年（七三七）から宝龜元年（七七〇）まで四度にわたり、平城京で大日経の写経や講讀が行われたということが正倉院文書にも出ております。

ところが、弘法大師が久米寺で大日経を感得されたのが七九八年としますと、それよりすでに六十年ほども以前に、漢訳の形で大日経は日本へやって来ている。そうしますと、大師が久米寺

の宝塔で大日経を感得されたということは何だか矛盾しているというか、解釈に苦しむわけでございます。

弘法大師がこのとき大日経というものに気付かれたということは、大師としてはちょっと遅すぎますし、どうもわからないのですけれども、ひよっとしたら大日経の原典と申しますか、サンクリットのものがこの宝塔に納めてあったのをごらんになったのではなからうかと思うわけがあります。そうしまして溯ってみますと、いわゆる養老年間に中国から帰ってきたお坊さんもあるわけですし(七一八年道慈帰国)、それから西暦七三五、六年頃に日本に来られたお坊さんもあるわけですから(玄昉帰国、唐僧道璿・天竺僧菩提僊那・林邑僧仏哲来日)、何かその辺のつながりははっきりわかれば真相がわかるんじゃないかと云う風な事を考えているわけです。

とにかく弘法大師は久米の宝塔において大日経(漢訳か原典かわかりませんが)を感得された、そしてこれは大変重要なお経だと云うので中国へ直接行って勉強すべきだと云う風に決意されたのではないかと思えます。

話をすればきりがございませんので、この辺で自作の八ミリ映画を映させて頂きたいと思えますのでよろしくお願い致します。この映画は、お配りしましたプリントの最後にその趣旨を書いておりますので、ちょっと読ませて頂きますが、

「昭和五十九年は、真言宗祖弘法大師ご入定千百五十年にあたります。これを記念して大師が

入唐されて師匠の惠果阿闍梨から真言密教の奥儀の伝授を受けられた長安の都（現在の西安市ですね）青龍寺の遺跡に、惠果・空海記念堂を、約千二百年前の唐代の様式により日中合同で復元建立することになり、交渉を重ねてきました。この映画は、昭和五十七年、第三回目の訪中で、最終協議を終って正式調印を無事完了した経過の記録映画です。」と云う事でございます。

——第三回真言宗訪中団の八ミリ映画上映（約四〇分間）——

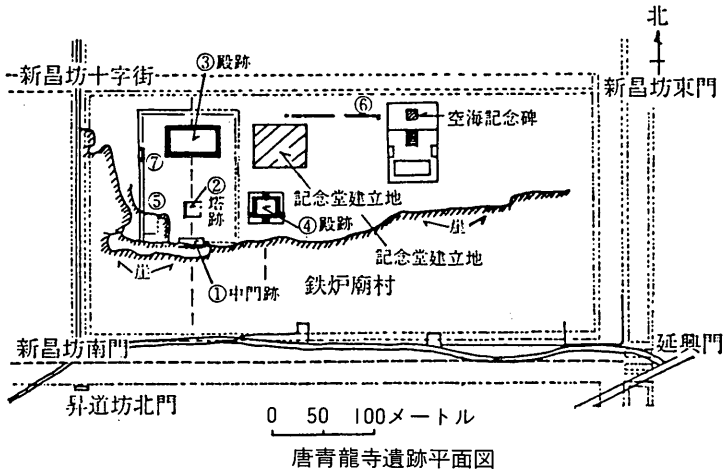
その後の青龍寺の様子、特に記念堂新築工事の進捗状況がわからず、私も気になっていたのですが、偶然にも最近訪中した私の知人が記念堂新築工事中のスナップ写真を持って来てくれましたので、たいへんうれしく思い、また安心した次第でございます。やはり正式調印に参列しました私どもとしては、本当に御堂が出来るのだろうかと懸念しておりました。何と申しまして日本中の真言宗の末寺から一万円ずつ拠出しました一億三千万といえますと、大きなお金でございますので、これで工事が約束通りに出来なかつたら、中国も恥をかくであろうし、私ども訪中団員としましても大きな責任がございます。とにかく工事が大分進んでいるようで安心いたしました。ただ、その建築工法は日本といろいろ違うようですが、大体、棟上げの段階まで行っているように思われます。それから、私たちが交渉しました時には五、六百平米の建物の計画でしたが、着工したのは約八百三十平米という大きな建築物になったので、写真に写っている工事の人々が非常に小さく見えました。

この青龍寺の遺跡が発掘され、確認、確定したのは、さきほどちょっと申し上げましたように、今からわずか二、三十年前のことでございます。

実は昔から、この青龍寺の位置につきましてはいろいろと意見があり、明、清時代にはすでに不明となつて、<sup>〃</sup>幻の青龍寺<sup>〃</sup>となつていたのです。そして西安の南東郊外の祭台村という所にある「石佛寺」というのが青龍寺の後身のお寺であろうと伝えられ、明治、大正時代には、日本から訪中した真言宗のお坊さんも、この石佛寺を探し当てて、ああ、これで弘法大師ご受法の青龍寺遺跡に辿り着いたと思ひ、感涙にむせびながら参詣したという話もあり、私もこの石佛寺の写真を見たことがございます。

大正から昭和の初期にかけて、有名な中国仏教の学者であつた常盤大定先生と桑原（じょう）隲蔵先生がこの青龍寺の位置について大論争をされたことがございます。その当時は、この石佛寺が青龍寺であるか否かで意見が分れたのですが、結局、決定的な結論は出ず、問題は青龍寺のあつた新昌坊の位置、さらに溯ると、新昌坊の東南東にあつた長安城東側の延興門の位置が確定しなければ青龍寺の位置は割り出せないということで、いつの間にか騒ぎはおさまつたのでございます。

戦後になつて、長安城に関する遺跡調査は中国社会科学院考古研究所の西安研究室主任である有名な考古学者、馬得志先生が中心となつて行われました。そして一九五六年から、長安城壁や城門の調査がはじまり、まず長安城の東の延興門の遺跡が発見され、そしてこの門に隣接してい



唐青龍寺遺跡平面図

たはずの各坊の位置が判明し、つづいて新昌坊の位置、そこにあった青龍寺の遺跡が発見されたのです。

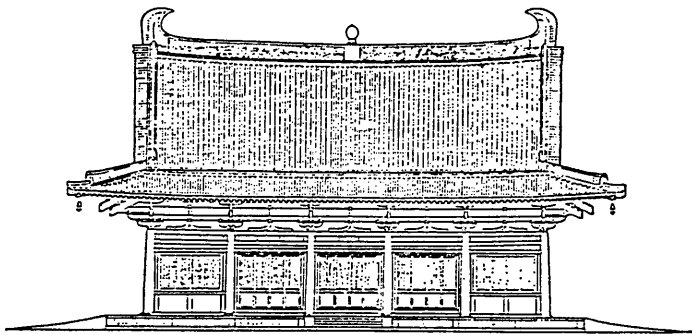
この青龍寺遺跡は、昔の長安の都にあった楽遊原という高台の上にあり、地形上も、歴史上も青龍寺の遺跡に間違いないということです。

そして、いわゆる「石佛寺」はここから西南西約二キロメートルのところ、長安の都の昌平坊の西北部にあたることまで判明して、漸く結論が出たわけがあります。(なお、この石佛寺は一九六〇年代の文化大革命によって破壊されてしまったそうです。)

青龍寺遺跡は、その後の綿密な調査によって、いろいろと判明し、いわゆる楽遊原上の各所から、図面の①中門、②塔跡(隋から唐にかけてさかんに造立された木塔らしい)、③殿跡(青龍



寺の大殿か?)、④殿跡(東塔院跡ではなからうか? 中国側では単に「四号遺跡」と称している)などが次々に発掘されました。中国側の説明によりますと④の殿跡は、ただ「四号遺跡」というのだと、「東塔院」とは言っていないわけですね。ところが今回の記念堂の平面図をご覧いただきますとわかるのですが、四号遺跡と非常に形が似ているのです。形が似ているからと言って、正しいとは言えませんが、中国でも、「第四号遺跡の復元」と盛んに言っておりますので、これがどうも東塔院のつもりではないだろうかと思われまます。その北十米離れた所に照合致しますと、私がここに書きました記念堂建立地という、これがどうも本当らしい。実は今日、偶然にも私が中国へ一緒に行きました高野山の阿部野竜正団長さんにお会いしましたので、これでよろしいかと、図面を確認してもらいましたら「うん、これで大体よいだろう、中国側はここへ今お堂を建てている」と云うことでございましたので、ちょっと安心したのでございます。中国ではこのような復元工事をする場合には文化財関係の法律により、もとの位置から少しはずして建築するようです。つまり旧堂から北へ約十メートル離して記念堂が建てられていると思えます。なお、この記念堂の東方に、映画にも出ましたが空海記念碑というのがありますが、これは日本の四国四県、つまり香川、徳島、高知、愛媛の四県が皆でお金を出し合って、一昨年(昭和五十七年)五月十九日に建設完成したもので、ちょうど私たちがまいりました十日ほど前に除幕式が行われたばかりでした。



恵果空海記念堂設計図(正立面図)

ここでちょっと補足致しますと、あの映画に来てまいりました設計図は、今日皆さんにお配り致しました設計図とはちょっと違いまして、屋根の形や全体の大きさも変わっております。現在建造中のお堂はだいぶ大きなものになっております。それからプリントのお堂の棟の真中に宝珠のようなものがありますね、これは最初の計画にはなかったわけでございます。ただしお堂の中は計画通り左右に金剛界と胎藏法の曼荼羅まんだらをかけまして、中央に本尊として恵果阿闍梨と、弘法大師の像をおまつりすることになって、現在日本で造っておる最中でございます。計画は去年の二月から仕事を始めて今年の二月には完成し、三月のご入定の記念の日に間に合わすと云うことだったのでございますけれども、ちょっと計画が遅れまして、結局この夏に完成するそうです。そして九月の十日ごろに落慶法要が行なわれることになっております。

真言宗としましては、一人でも大ぜいの方が行きたいのでございますけれども、中国側の受け入れ体制といえますか、ホテルが足りませんので、西安で三、四つくらいしか泊まれる所がないのではないかと思います。一昨年、さつき申し上げました空海の記念碑が出来た時に、四国の方が、三、四百人行ったんですね。そしたらとうとう寝る所が足りなくて、ホテルの廊下に寝かさされたというので、だいぶ苦情を聞いたと云う事で、今回は最高二百人以内にしばってほしいという中国側の希望でございまして、各本山で、人数の割り当てをして、現在、記念堂落慶法要に参加の準備をしている最中でございます。

今年には弘法大師様のご入定一、一五〇年記念の年でありますので、以上のようなお話をさせて頂きました。内容的には何を申し上げたか、とりとめもなかったわけですが、映画の上映も含め長時間にわたりまして、ご辛抱いただきまして本当に有難うございました。

（種智院大学教授  
東寺真言宗教学部長）